

「茶室の美学・茶室周辺の庭のデザイン」

隠居所づくり：茶室と路地

侘び茶：簡素という名の美学

16 世紀、日本の有力者たちは、茶室という狭い空間で要人たちとの会談や同盟を結ぶようになった。贅を尽くした男たちが、低い戸口をくぐり、森の奥の隠者の粗末な小屋に似せて作られた部屋で、小さな囲炉裏を囲んだ。これらの強力な指導者たちは、侘び茶と呼ばれる茶道の美学を追求していた。

16 世紀まで、お茶を飲む儀式は主に僧侶や貴族、上級武士が行っていた。茶会は上流階級の屋敷の豪華な応接間や寺のお堂で行われ、中国から輸入された豪華な茶器が好まれた。しかし、侘び茶は、シンプルで素朴な素材と最小限の装飾による、謙虚な職人技で、簡素で洗練されたものに重点を置いていた。

村田珠光（1423-1502）の思想を、大阪の豪商・武野紹鷗（1502-1555）が取り入れ、その弟子である千利休（1522-1591）が受け継ぎ、歴史上最も影響力のある茶人の一人となったのである。利休の有力な武士のパトロンを通じ、侘び茶は武士階級に普及し、現在では日本の茶道の主流となっている。

茶室：利休の理想

利休をはじめとする茶人たちは、茶道は野山にある小屋のような雰囲気であるべきだと考えていた。そのため、多くの茶室の名前には「隠れ家」や「静養所」などを意味する「庵」がついている。利休は「山里」という設計思想を好んだ。そのため、利休は茶室を囲むように茶庭を設け、両者を一体化した空間とした。

利休が理想とした茶室は、小さな独立した庵であった。客は、小さな四角い開口の入り口から這うように入っていく。天井の低い部屋には家具がなく、装飾も質素である。屋根は質素な茅葺きで、ほとんど加工されていない自然素材が使われている。

庭もまた、利休の理想の一翼を担っていた。離れの茶室には、飛び石を敷いた小さな庭「露地」があるべきと考えたのである。正式には、懐石料理の後に行われる茶の湯が始まる前に、客は庭の外側にある待合と呼ばれる屋根付きの待機スペースに集まる。亭主の準備が整ったことを知らせると（しばしば銅鑼の音や他の合図で）、客は露地に沿って茶室に向かう。その道には、手を洗うための蹲踞があるのが一般的である。

有楽の茶室

利休の弟子である有楽は、利休の好んだ侘び茶や小さな一戸建ての茶室の影響を受けている。しかし、その一方で、武家茶道の贅を尽くした作風を残している。如庵、元庵は、利休の茶室のほとんどよりも規模が大きいくつに加えて、屋根は茅葺きではなく、板葺きである。内部は、両茶室とも床の間の縁が黒漆塗りで、利休であれば華美過ぎると考えたであろうものとなっている。

如庵の露地

飛び石、蹲踞、井筒、石灯籠などの必要な部材は、如庵とともに三井家に売却された。建築家の堀口捨己は、1799 年に描かれた正伝院の絵図をもとに、各要素の配置を復元した。また、絵図に描かれている樹木に合わせて、黒松や楓を植えた。

南西の隅にある井筒は、侘び茶の祖である村田珠光のものを模して作られたものである。有楽は珠光を尊敬しており、彼の井筒を復元した後、自分の庭にも模造し、「元和元年（1615）九月二日、有楽」と刻んでいる。

もう一つ、如庵の露地には、「釜山海」と名付けられた石の蹲踞がある。これは石の産地が釜山（韓国南部）の海岸であることに由来する。1592 年、豊臣秀吉軍が朝鮮半島を侵略した際、この珍しい石を持ち帰り、秀吉に献上した後、有楽に贈られた。この石の中央のくぼみは波によって自然にできたもので、侘び茶の美学に基づいた理想的な蹲踞である。

元庵の露地

元庵の露地は、江戸時代（1603-1867）中期に描かれた絵図をもとに復元されたものである。茶室の南側に待合がある。そこから飛び石を渡っていくと、小さな立方体の蹲踞がある。絵図によると、元々の蹲踞は両側に仏像が彫られていた。石塔の台座を分解して作られた「四方仏手水鉢」であったことがわかる。堀口は、元庵に適したこの種の蹲踞が見つからなかったため、シンプルな立体型のものを選んだ。手水の周囲には、有楽の時代と同じようにカシの小木やナンテンが植えられている。

注意：庭園の一部には、黒い紐で結ばれた石が通路をふさいでいる場所がある。これは「留め石」といって、その先が立ち入り禁止であることを示している。